

谷 真 潮 の 万 葉 集 研 究

吉 野 忠

(高知大学教育学部国語研究室)

On Tani-Masio's Studies of "Man'yôsyû"

by

YOSINO Tadaki

1 は し が き

谷垣守、真潮父子によって、賀茂真淵の学問が土佐に導入され、その流れをくむ者が輩出し、鹿持雅澄によって大成せられたということは、かつて佐佐木信綱氏が「土佐に於ける万葉学の源流」(史学雑誌28編7号大正6)で明らかにせられ、また、松山秀美氏が「土佐に於ける万葉学」(土佐史壇16号17号大正15)で、人物を中心として詳説せられた。近くは、鴻巣隼雄氏が「鹿持雅澄と万葉学」(昭和33)で、いっそうくわしく、そのあとをたどってられる。(本稿の真潮の章に述べた文献など、すでに同書に紹介せられているものが多い。本稿に「鴻巣氏」と書いたのは同氏のこの書の記述をさす)

谷真潮については、松山氏の詳細な伝記がある(歌人群像)。また、昭和6年、宮地春樹の「万葉集私考」が正宗敦夫氏によって、日本古典全集の1冊として発行せられ、その中に真潮説が多く紹介せられている。武智雅一氏は「谷真潮の萬葉集の訓とところどころ」(国語国文 昭和16年6月)において、私考に出ている真潮説のすぐれた点を明らかにしてられる。

わたくしは、従来あまり検討せられていない資料によって、真潮の万葉集研究の概況をしるしてみたいと思うのである。それについて、まず、先行する祖父秦山、父垣守からみていきたい。

各人の年代等については、終にそえた「土佐万葉学の系譜」を参照せられたい。本稿は前稿(本報告第12巻)「国学に関する谷秦山・垣守の事跡」(文中にいう「前稿」)とたかいに補うところがある。ご参照いただければ幸いである。

2 谷 秦 山 と 万 葉 集

秦山が日本人として学ぶべきは、神道・有職・歌学であるとした(前稿)のは、師渡川春海の教をうけたものである。

生于我国者、不_レ学_二神職歌之三_一而言_レ学者、其妄也已。(秦山集甲乙録8宝永2年所聞)

西内雅氏は、「春海は、……歌学として、特に見るべきものは見当らぬ。従って、春海の云ふ歌道は、日本人の素養として、学ぶべきを述べたものであって、春海学の体系の中へ、入るものとは思はない。」(谷秦山の学81ペ)といっている。秦山に与えた元禄10年3月の書簡にも

古事記歌道之事は曾学不申候へは如何候へ共、承及候迄加朱筆候

とある。(天柱密談)^(註1)「和歌は日本人の嗜み」という伝統によるものと思われる。

秦山においても、歌学はその域を出ていない。しかし、春海よりも、この方面に一步を進めている観がある(前稿)。

ここには、和歌に密着したことがらだけをとり出してみよう。

1. かれの歌に、

人のもとへ歌の集かりに遣すとて

ふし柴のありしかきりはこりはてぬ今は松の葉かきあつめでん(鍋山日抄23, 秦山詠草)

というのがあつた。歌集をできるだけ見ようとしている。万葉集は古来重んぜられたものであるから、その中には当然はいつているはずである。さらに、歌もよんでいる。けれども、子垣守が反古から集めた歌は17首にすぎず、亡児を思う歌など胸にせまるひびきがあつたが、歌風としては当時の普通の歌である。かれは詩を多く作っているが、歌にはそれほど熱を入れているとは見えない。歌集を見、歌をよむことは、当時の教養人の嗜みであつた。しかし、ここに、かれの「日本の道」を求める学問のあり方との関連を見のがすことはできないし、子垣守の国学への傾斜の源を見ることができるのである。

2. 神代紀研究の補翼として、万葉集をよくみている。つまり、万葉集を補助資料、考証の資料としたのであつた。(もとより先例のあることではあるが)

元禄8年9月(33才)、春海に出した問目に、

カナヅカヒノ事可有候事ノ様ニ奉存候。万葉ノ文字ノウメ様、神代ノ巻ノ註ノ字等にも見へ申候。(初問第二)

といつており、すでに万葉集は相当綿密に読んでいる。

泰山集甲乙録九は「重遠ノ私考及ヒ諸家ニ問ク所ヲ雑記」したものであるが、その中に万葉集の歌を引く数条がある。

① 萬葉云。蜻島倭之國者神柄跡言挙不為國。雖然吾者事上為。柿木人磨曰。葦原水穂國者。神在隨事挙不為國。雖然辭挙叙吾為。重遠謂。吾國之道。秘レ之者正也。然有レ時挙レ之。固亦不レ可レ無也。此二首言₂其通屈₁。蓋古代之伝來歟。

② 人磨曰。真貴島倭國者。事靈之所佐國叙。真福在與具。重遠謂。此亦契₂乎神伝₁矣。

この2条は、言挙、言靈のことをとりあげたのである。

③ 神代巻曰。使₂山雷₁者採₂五百箇真坂樹八十玉籤₁。野槌者採₂五百箇野薦八十玉籤₁。此兩籤諸説皆曰。懸₂鏡玉幣₁之台也。重遠嘗疑。坂樹固可レ懸₂物。野薦恐不レ可レ懸₂物。久未₂得₂其説₁。頃日説₂万葉集歌₁曰。竹珠乎無間貫垂。天地之神祇乎曾吾祈。見安曰。竹珠如₂管以獻₂神者也。拠₂此説₁。野薦蓋竹珠之料歟。

④ 古事記上。汝之宇志波祁流葦原中国。延経曰。宇志主也。丹波道主王作₂美知能宇斯王₁。波祁流張也。言₂主₂張其地₁也。重遠謂。牛掃之詞。万葉多有₂之。諸解不₂分明₁。此説当₂為₂斯矣。

⑤ 万葉十曰。足玉母手珠毛由良爾織旛乎。旧事記一曰。伊奘諾尊。御頸珠之玉緒母由良爾取由良迦斯。古事記上曰。打₂折三段₁而奴那登母母由良爾。是皆狀₂玉音₁也。訓₂由良₁訓₂母由良₁。非₂無₂証。

この3条は記紀等の訓釈の参考資料としたのである。(ほか1条略す)

かれが心血を注いだ神代巻塩土伝(宝永4年9月16日成。補訂して板行)には、万葉集を引用すること5である。その1は、上の③に当る。

① 薦小竹也。蓋坂樹籤懸₂鏡玉幣₁之具。野薦籤万葉集所謂竹珠而貫垂以獻₂神者。(草本板本同)(塩土伝三)

② 万葉集歌與鳥鴨云船。説者謂船形似鳥。故云鴨。鳥訓同。(オキツトリカモツクシマの注。見安に「舟ヲカモノニ似テ作ルカ故也」とある。拾穂抄によるのであろうが、泰山日抄の抜書には見えない)

そのほか、「啼沢女命」を万葉で説明し、「與槲」の万葉の文字を引く(奥津葉戸の注)などである。また、中臣被塩土伝(同10月6日成)にも

古人言₂事必原₂乎厥初₁。厚之至也。至₂中古万葉集之歌₁。猶有₂此氣象₁。

といつている。(註2)

泰山は宝永5年2月26日万葉集拾穂抄を抄しおえている(泰山日抄3)が、その中に巻3の見安の注が抜書きされている。それによって、③の「見安」は拾穂抄によるものであり、野薦についての新解はその時に成ることがわかる。塩土伝の成立から、それは宝永4年ということになる。

泰山日抄の拾穂抄は借覧ではないかと思われるが、かれの手もとにも、寛永版か、その写しか、何か1本はあつたであろう。

「泰山先生手簡」高橋太兵衛(喜兵衛正元の祖父)あての書簡に、

一万葉出来合ノ事と存候。外に春に成候ハ、工夫可有候。御苦勞ニ被成ましく候。(卷下10)
とあるのは、万葉集を貸して写させたものであろうか。

3 垣 守 と 万 葉 集

垣守も、人として学ぶべきものとして、神道・有職・歌道をあげている(元文3年「新爪櫛」)。そして、この3学の、秦山・垣守における位置も、この順ではなかったかと思われる。その「歌道」というのは、和歌だけでなく、かな文学をも包含することは、垣守自製の蔵書目録の「歌書」の目に、枕草紙・土佐日記・紫式部日記・住吉物語・大和物語・宇治拾遺・吉野拾遺などが記載せられていることによっても理解せられるであろう。かれの歌道は、「一も闕テハ不可也」の1つではあっても、なお第3の位置にあったと思われるけれども、かれは秦山よりもよほどのほうに深入りしている。

かれの和歌に対する見解は、次のことばにうかがわれる。

大和歌は……詩章とは大にかはりありて、我國の道の第一にして、造化と人情とわりふを合せぬる大事ありて、人としては貴賤上下詠すへき事なり。(享保20, 秦山詠草序。鍋山日抄23)

かれは元文元年はじめて江戸に行ったが、江戸では、伴部安崇・岡田盤齋の両先輩に神道を問うた。伴部は元文5年に、盤齋は延享元年6月になくなった。かれはこの延享元年9月、はじめて賀茂真淵をたずね、ついて入門したのであるが、^(註3) それは有職・歌道を学ぶためであった。そして、おそらくは真淵の紹介によって、在満にも入門し、有職は主として在満に、歌道は主として真淵に承るということになったらしい。(前稿7ペ)

入門後の垣守は熱心に古典会読や歌会に出席し、その他の日にも真淵の所に出入し、書物を借り、これを写したことも多い。真淵の著書に垣守の名も見え(祝詞解・冠辞考)、真淵も垣守を尊重しているのである。ところが、寛延元年11月16日真淵が大いに怒る事件があり、それと関連があると、かならずしもいえないが、真淵との「確執」がとけず、寛延3年11月、真淵・在満から同時に退門した。^(註4)

延享元年冬から寛延3年冬まで、満6年であるが、江戸滞在はその約半分であるから、3年余りにしかならない。しかし、この3年余と、なおその延長としての在国の間における、かれの国学吸収の努力はめざましいものがあった。万葉集に関することをみることにしよう。

1. 万葉集の会読への出席

真淵の万葉集会読へ垣守が出席したのは、南信一氏によれば、35回に及び、進度は次のようになっている。^(註5)注はわたくしの加えたものである。

延享2. 2. 25 開席
同 2. 4. 6 万葉二(5.13には高知着帰家)
同 5. 4. 9 万葉九(4月初めごろ江戸着)
寛延元. 10. 26 十卷済(延享5. 7. 12改元)
同 元閏10. 6 卷十一
同 2. 正. 21 卷十二(5. 8 高知着帰家)

なお、寛延3年の9月10月にも出席している。

上の順序を見ると、巻1から巻を追うて会読を進めていったものと思われる。

この表には延享3・4年がない。その間万葉の会読は行なわれなかったのであろうか。垣守の延享3・4年の手帳の表紙に「月次式日」(前稿)として、「朔日論語 万葉」「十一日論語 万葉」「十三日歌会」「廿一日論語 万葉」とある。万葉は垣守が講ずるのではないはずであるから、これは真淵の万葉集会読であると見るべきであろう。さすれば、月3回、1の日に行なわれたことにな

る。そして、垣守父子も出席したはずである。

2 万葉集の書写ならびに書入れ

延享3・4年の手帳によると、江戸行きの手帳中の「万葉集」がある。「日本書紀二部」「伊勢物語二本」とあるから、万葉集は1部である。同じ手帳の「江府用事」の中に「万葉集書写」がある。また、「江府新求書」の中に「○万葉集 四五六七八九」とあり、○は「岡部」の印である。岡部方にあるのを写したというのであろうか。(傍に「国歌八論」があり、羽倉の印がついている。垣守はこれをこの年7・8月に借り写した。また「きぬかつき日記」に岡部の印があるが、6月真淵所持本を真淵に写させている。この2部現存)「書写頼可申人人」のメモもあるように、人人に頼んで諸書を写したらしい。これで見ると、延享4年帰国のときには、万葉集のある巻巻は2部になっていたはずである。この旅には真淵がいっしょであるから、会読出席などに2本を要したと思われる。

真淵の蔵書目録の「秘本」の目に、

万葉集 白本 廿冊

同 小本 廿冊

とあり、郷兄の隈山蔵書目には、

万葉集 白本 二十冊

同 小本書入 二十冊

同 大本書入 別府柳平へ遺ス 十冊

とある。「秘本」としている点から見て、「白本」「小本」は垣守時代の写本ではあるまいか。

さて、高知県立図書館山内文庫谷家旧蔵書には万葉集が3部ある。A911, 156, B911, 203, C911, 263 である。ABCは、わたくしがかりにつけたものである。以下この符号で呼ぶ。

A本20冊(大本)は、寛永版本を訓を除いて写したものである。巻一の原本奥書に附した朱書入れは、天明4年真淵であるが、巻一本文の筆跡は垣守である。この本は目録にいう「白本」ではないかと思う。「白本」とは、おそらくは白文本という意味であろう。巻二以下は垣守の筆ではないらしく、人に頼んで写したものであろうが、あまり時を隔てないうちにそろえたのではあるまいか

この巻一には、アイで句点(○)を施し、朱でところどころ部分的に訓を左傍につけてあるのであるが、その筆跡は本文と同一と思われる。すなわち、垣守の筆と思う。傍訓を施した歌は、1番を除き、すべて真淵の抜抄略解(後述)にあるものであって、その訓に一致する。51番の「嫁女」を「オトメ」とよむのはその1例である。41番の「劍著」はこの本には「釧」がアイで傍替してあるが、抜抄は「釧」を本文にしている。抜抄との一致から、抜抄を参考にして記入したとも考えられるが、1番の歌は(籠をカタミ、吉閑をノラへとよんでいる)抜抄にはないのであるから、これは、真淵の会読に列した垣守が記入したものと見なければなるまい。上にしるしたように、延享2年春の巻一の会に出ているから、そこで得た訓と思われる。

巻三の一部に、アイの○点がつき、朱訓も左にあるのがある。これが垣守なら、延享3年のであろうか。それにしても少し進みようがおそいと思われる。それに、中間にゆがらいしかない。

巻九には、アイの○点がつき、訓が左にある。垣守がつけたと思われる。上記のように、かれは巻九の会読に出ている。この傍訓・誤字説などを、金刀比羅宮の真淵書入本万葉集に対照してみると、約250例中75%は一致し、一致しないものに、真淵本に抹消された旧説がある。「黒牛方」(1672)前玉(1744)「遠妻四高爾有世婆」(1746)「吾毛交牟」(1759)「小垣内」(1800)、また1790番の「有」を「武」の誤歟とするなど一。残りのものもおそらく真淵の旧説であろう(海界ウナビ歟など)。巻十の初めに少し巻九と同じ形の書入れがある。(補註1)

すなわち、巻一・巻九と巻三・巻十の一部とは垣守の書入れであると思われる。それは真淵の会読で得たものと推定される。(即席記入ではなく、聞書によって整理記入したものか)

その他の巻にも書入れがあるが、それは別人のようである。(真潮の書き入れもあろう)^(補註2)

B本20冊、小形本である。この形から、真潮の書目の「小本」と推定せられる。これも、寛永版本を訓を除いて写したものである。書入れが相当多く、隈山蔵書目の「書入」にあたる。真潮の書入れが多いと思われる。この本の書入れについては真潮のところで述べることにする。

前述のことから、A本は延享2年ごろ、B本は同3、4年ごろの書写と見られるではあるまいか。

C本については、真潮のところで述べるが、これは景井などの使用本かと思われ、鹿持雅澄の説の記入が多い。これも白文を写して、書き入れしたものである。これは垣守よりは後の写本である。

A B本は垣守が書写しおよび書写させたものだろうと考えたが、いずれも白文である。真淵は寛延2年2月万葉解の序において、万葉集のよみ方を述べて、第1段階は今の点本で、第2段階では活字無訓本に今本の異同を注記し、「無点にて読へし」といっている。金刀比羅宮に蔵せられる真淵書入本万葉集の巻一・二は活字無訓本である(巻三以下は寛永版本)。今、この垣守によって寛永版本の無訓化作業(書写)が行なわれ、しかも、おそらくそれを会読用テキストとして、大切なことだけ記入していったことは、真淵の主張が延享2年以前からなされていたこと、会読にそれを実行したかもしれないことを想像させるのである。(また、異本の異同注記もなされている)白文テキストを用いたことは、後年の土佐人による白文万葉集(古万葉集)の刊行と思い合わせて、興味深い。後の土佐の万葉研究会は白文主義ではなかったかとも思われる。

3 万葉関係の書物の入手

- 延享2. 3. 国歌隠説を写す。八論余言(真淵所持本)を写す。(山内文庫本両書奥書)
- 2. 7. (契沖雑記黒田氏本を写す。河社黒田氏本を真潮に写させる。(山内文庫本両書奥書))
- 3. 7. 国歌八論(在満所持本)を写す。(山内文庫本奥書)
- 4. 1. 再奉答金吾君論(真淵所持本)を写す。(山内文庫本奥書)
- 4. 10. 歌体約言(真淵自筆土佐侯藏本)を写す。(山内文庫本奥書)
- 5. 6. 真淵著万葉集抜抄略解(真淵所持本)巻一を写す。^(註6)(山内文庫本奥書)
- 5. 7. 同書巻二を写す。(同)

延享3年の手帳の「江府用事」の中に「万葉代匠記」がある。手に入ったかどうかかわからないが、寛延2年写した「董生氏書目録」に、「万葉代匠記三十一巻」「川社」「雑記」「吐懐篇」「厚顔抄」などに所持の印がついている。「川社」「雑記」は上記のように持ってあり、「厚顔抄」も延享3年にもっている。山内文庫「勝地吐懐篇」2冊は「武元直熈写之」「真潮校之」とあり。真潮の入手かと思われるが、あるいは垣守のとき入手し、後真潮が校したとも考えられないこともない。所持印は真潮などが後年つけたかと疑えなくもないが、垣守とするのがふさわしく思われる(かれの集書熱心から見て)。もし垣守なら、代匠記を延享3年以後に手に入れていたことになる。真潮のところに述べる代匠記巻三以下との関係も考えなければならぬ。それにある「真淵按」からみると、垣守時代に真淵本を写したのものかとも思われる。疑を存する。

また、延享元年5月写した「武江品川御数寄方書目録抜書」の「万葉集」卅に所持の印がある。これは垣守の蔵書目録(寛保延享ごろの作製と推定される)にある「万葉拾穂抄」30冊であろうと思う。あるいは、秦山の晩年に購入したものかもしれない。

4 万葉研究の結果が神代紀研究に織りこまれていること

かれが、延享3年、岡田宗殖・小島長高・徳田敷要のために講じたものの筆記「神代卷^{ツグ}早別草」に萬葉集を引合いに出すこと15回以上である。(中に2つばかり秦山所引のと同じのがある)

- ① 婦人は主がなければ邪神の災があると云ふ事で、万葉の歌にもある。(クシナグヒメ)
- ② 万葉杯にも一座の興に唄うた事とみゆるもある。(夷曲)
- ③ 幸 伝来の説はサヂと濁音に訓すれ共サチと清で読がよかるふ。濁音には読にくい字ぞ。万葉杯にも幸弓幸矢杯と云ことがあるが、皆清音の字を損る。転語するにもサツと云ふ。サツといはぬ。(海宮遊行)
- ④ 伊太祁曾神は五十猛を万葉書にせし伝写の誤と云事ぞ。祁は万葉杯に、多くけの仮名に損る。曾は魯の誤り。(不植韓地)

⑤ 百不足は八十と云ん為の冠辞。万葉に、田口広磨が死時、刑部垂磨が歌に、もゝたらすやそすみさかにたむけせは(万三427) 杯ともいへり。(今我当云々)

⑥ 万葉にナクコナス杯と有はナク子の如と云事そ。(如五月蠅)

かれの手沢本の神代紀・神武紀にも万葉が引用されている。また、かれは、寛延元年のメモに「日本記古事記ノ訓点、万葉集ニテ校正スベシ」(前稿)と書いている。

なお、延享3・4年の「江戸立用事覚」に、土佐方言コツモが万葉のコツミの転だという見解なども見えることを付記しておきたい。

5 万葉風の歌

真淵が宗武の影響もあって、万葉風に転換しようとするころ、垣守は入門したのであった。かれは、真淵に歌の添削を乞うているが、ここにかれは万葉ぶりの歌をもよもうとするようになる。その趣は、前稿に紹介したメモや歌稿によってわかるのである。万葉語を用い、時に万葉がなで書いたこともあった。

明奴礼波吾家仁婦留年也止老乎忘呂笑良久善毛(懐紙による。寛延2年か)

しかし、万葉のまねに止まったのはやむをえないことであった。

かれにおいて、万葉集は歌学の基本書であった。鍋山随筆寛延3年ごろのメモに、万葉集古今集新葉集を「已上歌学本書」としている(前稿7ペ)。延享3年の手帳には、万葉 古今 新葉を並記し、その横に、家持 長嘯 井上通女をしるしている。家持をあげているのは、おそらく、垣守が家持の歌を好んだためであろう。だが、かれの万葉学は、受け入れに忙しく、まだ発明は少ない。

4 谷 真 潮 の 生 涯

谷真潮(丹内。北溪と号す。青年期の名は挙準)の生涯については、松山秀美氏の「歌人群像」に詳しい。今、万葉集に関係のあることを主として、ごく概略をしるすことにする。

享保12年(1727)、垣守の長男として生まれた。6才のとき、弟垣雄が、16才のとき、弟好井(万六伴兄)が生まれた。真潮は男の子が2人あったが、いずれも20代でなくなったので、真潮のあとには好井がつぎ、好井のあとは垣雄の子郷兄がついだ。万葉集古義に説の見える景井は好井の子で、干城の父である。(補註3)

真潮は若うして秀才であったようである。かれの家集巻頭の歌は14才の春の作である。

延享3年春、20才の真潮は、父に伴なわれて、はじめて江戸に行き、翌年4月まで滞在した。この間、父につれられて賀茂真淵のところに出入したと思われる。かくて、帰国前か帰国後かはわからないが、延享4年真淵の門人となり、真淵に将来を大いに期待された。

別紙詠草十三首共に万葉或は古今集体を早く心得候物也。父丹四郎召つれ候て去々年出府、去年四月帰国候以前も、近体を少々詠習居候。去年以後拙者門弟に入候て、折ふし詠出候所、此詠を見候へば古意を得候 処拔群也。(県居書簡続編51)

垣守が真潮を江戸に伴なったのはこの旅だけであるから、この書簡は延享5年(寛延元年)のものである。(註7)

宝暦2年(26才)父が没したので、あとをつぎ、天文儒学をもって出仕し、10年新設の教授館教授役(4人)となった。宝暦4年以後、職により、江戸に行くことが度度であるが、13年2月には好井をつれて江戸に行き、翌年6月帰国した。この滞在中、9月、真淵に誓詞を出している(佐佐木信綱氏、続日本歌学全書県居門人録 付記参照)。また、前年11月なくなった、同郷の先輩橘常樹の1周忌追悼会に出席し、歌をよんでいる。ここに改めて誓詞を出したのは、父垣守の退門から、垣守の子として、真淵との間が疎遠になっていたためではあるまいかと想像される。(しかし、あとで述

べるように宝暦12年初めに万葉会誌に出ているらしい形跡がある) また、9月には綾足・百兄も誓詞を出しているから、そのついでに、かれも出したのかもしれない。しかし、真淵は自記の門人録に、真潮を延享ごろ入門の位置に置いている。真淵がなくなった明和6年は真潮は43才である。

安永6年(52才)浦奉行となり、天明3年(57才)秋、部下の過失により謹慎となり、翌年冬ゆるされたが、願うて、5年5月浦奉行を免ぜられた。天明4年ごろは閑散の身として、歌会や日本紀会によく出ているが、親友春樹(真潮より1年下)も、4年5月から「万葉集私考」巻一を始めている。春樹は5年4月なくなった。

2年おいて、天明7年郡奉行、8年大目附(儒臣として最初)、寛政元年教授館頭取を兼ね、役人として多忙の日を送ったが、かれを信任し登庸した藩主豊雍卒し、辞職を願い、3年(65才)ゆるされた。この年鹿持雅澄が生まれた。その後悠悠晩年を送って、寛政9年10月病死した。(71才)

かれは、非常に感激性の強い人であったようである。また、「豪傑ニシテ不羈」といわれる。親友春樹も「丹内ト云人ハ大綱ノ挙ル人ニテ小節ハ論スルニ足ラヌ人也」といったという。すでに父垣守が、「丹内は向來政事に功者なるべし」と予言したとのことであるが、実際そうだった。

豪放の性は萬葉風の歌を好ましめたのであろう。万葉の特色として、「まこと」「菜樸」「ますらをぶり」があげられるが、いずれも真潮にぴったりする性質であった。賀茂真淵との遭遇によって、たちまちに古風の歌が進展したことは、ゆえありといわなければなるまい。

細事にかかわらぬかれは、綿密な研究には向かなかつたかもしれない。しかし、かれは鋭い眼識をそなえていた。和歌の判定においても、たちまちに人をうなずかせる批判をしたとのことであるが、万葉集の研究においても、すぐれた見解を示している。

かれは指導者であった。かれの万葉の会誌は、綿密な春樹の「私考」を生じさせたのではないかと思われる。かれの有言・無言の指導のもとに、高橋正元・中山巖水・今村楽・宮地仲枝・楠瀬清蔭その他の門人が育ち、土佐に万葉学が根をおろし、栄えていったと思われるのである。

5 真潮の万葉集研究

わたくしの知っている事実を年表式にしると、次のようである。

青年期 家藏の拾穂抄・抜抄略解などを読んだであろう。

- 宝暦4(28才) 代匠記1冊、厚顔抄2冊を写す。(真潮の「市中家中記」による。)(江戸でか)(これは記憶ちがいで次のものをさすのである。)
- 5(29才) (厚顔抄中下2冊を写す。(山内文庫本)(先人所蔵本中下故ありて闕くるによる))
- 6(30才) 代匠記巻一上下を写す。(8月13日終)(山内文庫本)
- 14(38才) 2月真淵万葉会誌巻15終了(江戸)(B本奥書)
- 明和2(39才) (正月垣守草写の契沖雑記を浄写、去年碓河社浄写終る。(山内文庫本))
- 8(45才) 万葉巻8読了(B本奥書)
- 安永7(52才) 5月万葉契説全書書写について誓詞を書く(好井が書写か)(鴻巣氏による)
- 9(54才) (真潮邸日本紀会雄略紀講了。)
- 天明元(55才) 代匠記を校する(翌年にわたる)(山内文庫本)
- 天明2(56才) 代匠記を再校する(翌年にわたる)(山内文庫本)
- 4(58才) 巻1奥書に朱書入れをする(A本)。親音・弘矩宅などで日本紀会誌。人々の家の歌会にも出席。
- 寛政4(66才) (神代紀講釈開始。)
- 5(67才) 万葉巻12・13・14書入れ。(B本奥書)
- 8(70才) 代匠記を3校する(前年かららしい)(山内文庫本)

なお、山内文庫に、「武元直熙写之 真潮校之」の奥書のある、契沖の「勝地吐憤編」2冊がある。また、好井の目録かと思われる「書目録」に「万葉集 真淵点 甘巻」がある。どういうものかを知らないが、真

潮か好井が得たものであろう。

好井は京・大阪に長くいて、橘経亮・渡辺重名と研究仲間であった（天明6年10月重名の「くしれのはれま」による）。重名は天明5年、経亮秘蔵の古本によって万葉集の校合をして8月におえているが、好井は2月から在京している。好井はこの校本を見せてもらったものと思う。これも、何らか、真潮の研究に関係をもつに至ったかもしれない。^(註8)

なお、榊取魚彦と真潮と交友関係にあったらしいことが、真潮の歌でわかる。

以下、真潮書入本を中心とした真潮説、代匠記の校訂、真潮の編集した万葉類聚・万葉助語集について述べることにしたい。

1.0. B本の書入れ

垣守のところにするしたB本は、たくさんの「真潮案」の書き入れがある。また、巻8・12・13・14・15の5巻の終りに朱で次のように書いてある。年代順にする。

a 宝暦十四年二月八日口園ニテ聞之^(註9)(巻十五)(西紀1764)

b 明和八卯十月八日(巻八)(1771)

c 寛政癸丑(5年)ノ三月朱ヲ入了(巻十二)(1793)

寛政癸丑三月廿三日加朱(巻十四)

寛政癸丑四月再加朱了真潮宮地春樹校本並私考ヲ以合セ考ル所也春樹私考ハ諸説ヲ挙テ本居氏ニ訂シ
ル説也(巻十三)

(これらの奥書はすでに鴻巣氏360ぺに紹介されている)

これらの年月はabcの3期になっている。したがって、寛政5年の3巻は真潮であっても、宝暦・明和のは真潮以外と考えられないこともないが、すべて真潮であろうと思う(1.4参照)。

1.1. 宝暦14年(明和元年)2月には、真潮(38才)は好井を伴なって、江戸に滞在していた。金刀比羅宮の真淵書入本万葉集の巻十五の奥に、

宝暦十四年二月会読了

とあって、真淵の第6回会読(巻九・十奥書)で巻十五がそのとき終わったことを示している。「口園」の文字は判読できないにしても、これは、かならず真淵を中心にした会でなければならぬ。書入れ内容を真淵書入本のと対照するに、果して、真淵の講義を筆記したものである。真淵書入本にないこともあるが、それは真淵が書入本にはなくても講義に言ったことであろうと思われる。

たとえば「羽具久毛流」(3598)について、「ハコクマルト云コト羽ニフクムナリ」は真淵書入本にはない。また「伊麻須君」(3582)について、「イニマス也 二巻ニ例アリ 在ヲモイマスト云コ、ハユクコトヲ云」とあるが、真淵本には「往ます也 二巻に例あり」とあり、真淵本のからはみ出している部分は、真淵がつけ加えて言ったものであろう。3593の歌の「伊保里世武和礼」について、「古のは往サキサキニカリニ家作リテ旅ネシタルユヘイホリスト云此時分ナトハモハヤサモナカリツランナレト旅ネノコトヲ古ニヨリテ云也」とあるのも真淵本にはない。

なお、見返しにも真淵説がかいてある。

かくて、巻十五は真淵会読の席での講義の記入と思われるのであるが、真潮の名をあらわした書入れもある。3599の歌の「神鳥」について、真淵は「式備中小田郡神鳥神社」と書いているが、真潮は「延喜式備中小田郡神鳥神社」と真淵の講義をしるした後に「潮案備後ノ神鳥歟」とし、さらに墨で「潮案備前岡山口邑久江ト云所ハ古ノ大伯也此側ニ神嶋ト云所アリコレ歟」と記入している。墨はむろん後日の追記であろう。

巻十五の朱書入れは初頭から真淵の講義の書入れと思われるから、おそらく宝暦13年の冬ごろからはじまった巻十五の会読に真潮は出席していたのである。

真潮は明和元年は5月ごろまで江戸にいたのであるから、巻十六の会読にも出たではないかと想像されるが、巻十六の書入れは真淵本と一致しないようである。

なお、巻十は、真淵書入本と対照すると、真淵の講義を書いたものかと思われるふしがある。「水飯合 飯ハ激ニテミナギロフ」(1849)とあるが、真淵本には「水激合 ミナギラフ」とあるなどである。巻十の真淵会読は宝暦12年3月から5月8日に至る(真淵書入本)のであるが、真潮は4月17日まで江戸にいたのであるから、会読に出席した可能性がある。誓詞を出した1年半あまり前である。

1. 2. 明和8年(45才)については、参照する資料を有しない。10月には高知にいたはずである。

1. 3. 寛政5年(67才)はすでに大目付も退いて閑散な時である。この時「私考」を参考している。

「私考」の著者宮地春樹は真潮の親友である。かれは儒学に専心したようであるが、いつのころからか、江戸の萩原宗固に教をうけている。安永5年ごろの宗固に添削してもらった懐紙(高知市民図書館平尾文庫)に、宗固が「古調もよろしく候へ共今の時体をもよみよみて後に古体を執行したし」と書いている。春樹が古風にそまったのは真潮の影響であろう。かれは天明2年(55才)本居宣長に入門した(鈴屋門人録)。門人録によると、伊勢以外の人で入門する人はまだごく少数であったときである。かれが宣長に入門したのは、万葉集の疑義を解くためであったと推定される。かれは、安永8年秋から9年4月にかけて、代匠記・考・冠辞考を参考にし、疑難のところは真潮に質し、自説も加えて、万葉集に書入れを行ない、さらに翌天明元年9月に始め、4年5月17日におえ(以上竹柏園蔵春樹書入本奥書——鴻巣氏による)、その月末から「万葉集私考」の執筆にとりかかっている(巻十七には「天明四甲辰孟春始」とあるが、それは再書入の時か)。この再書入の期間に宣長に入門し、万葉問目を送って詳細な指導をあおいでいるのである。この「私考」は脱稿に至らないで、かれは天明5年4月11日58才でなくなった。18才で父を失った仲枝が寛政4年(25才)8月にこれを装釘した。仲枝は真潮の門人である。真潮は仲枝からこれを借り受け、B本に書入れを行なったと思われる。あるいは仲枝に督促して、亡友の遺稿を整理させ、それを借覧したのかとも想像される。

1. 4. B本全体の書入れは、一時でなく、長い間にわたっているから、もちろん、同じ部分に、何回かの書入れが重なっているところもあると思う。

ところで、20冊を通覧すると、次の点に気づくのである。

- ① 巻十までには「本居云」がないが、巻十一・十二・十三・十四・十六などには出てくる。
- ② 巻十一には「春樹云」も出てくる。
- ③ 「景云」(景井云)が巻十四からぼつぼつある(これは墨)。
- ④ 「真潮案」は、あとの表のように、多い巻と少ない巻と、全くない巻とある。

このうち、③は、後代に景井が記入したものであるから、ここでは問題外である。

巻十三の奥書によれば、寛政5年、春樹の校本と私考とを参考にしたとある。巻十二、十四も同様であろう(両巻の本居説30がいずれも私考にある)が、他の巻についてはどうであろうか。巻十一にある本居説5つは私考にあるものであり、2732の「左太」の注や、2755の注は私考の「今按」に同じであり、2820の「春樹云」は私考の「今按」と大同であるから、私考を参考にしていると見られる。巻十六にも1か所であるが私考にある本居説を引いているから、本居説の見える巻十一、十二、十三、十四、十六の書入れは、寛政5年ごろのものであると推定される。

巻十以前の書入れはそれより前であると思う。巻一などには、真淵の抜抄略解を参考にしているところがある。「抜抄」の名も1か所見える。「抜抄」となくても抜抄と一致するものがある)しかし、巻一などに、「本居」の名は見えないけれども、本居説らしいものがある。53番の歌「安礼衝哉」に「生レツグ也ヤハ疑ニアラスヨトヨヒ出ス也」とあるのや、29番の「書」を「盡」の誤とするのは、私考や玉の小琴によるものではあるまいか。すると、寛政の書入れかとも思われるが、巻十一以下のように本居と書いてないから、それ以前か。また、本居説との偶合であろうか。(附註4)

1. 5. B本には「真潮案」(略して「潮案」「真」というのもある)が多数ある。「真潮案」と

ないのにも真潮説はあるであろう。次の例でもわかるのである。

卷六 948 決 敏ノ字誤歟 真潮又案スル 決捨^{エカケ}ノ心にてカケトヨムヘシ

しかし、「真潮案」とないものは真潮説と確認できないから、以下「真潮案」だけ採り上げる。

1. 6. B本書入と私考との関係

「私考」にはたくさんの真潮説がある。それには、すでに春樹が承知していた真潮説のほか、前記の書入れに当って、真潮に質した時の答も多いのであろう。「私考」の真潮説とB本の書入れとは一致するものもあるが、一方にないものもある。書入れには、「私考」以前の説と、「私考」を見ての説とあることは前述のとおりである。書入れと「私考」と対照してみると次のようになる。

書入に真潮案とあるが同じ内容のことが私考には真潮とないこともある。それは()をつけた。逆に私考に真潮とあるが書入に真潮とないものは()をつけた。頭の〔]は数、あとの数字は歌の番号である。同番が並んでいるのは同じ歌に何か所か説のある場合である。

	両者にあるもの	書入にあって私考にないもの	私考にあって書入にないもの
卷一〔14〕	〔6〕 13. 13. 53 (74) (65. 82)	〔6〕 28. 33. 34. 44. 76. 83	〔2〕 55. 84 (補注5)
卷二〔15〕	〔4〕 155. 156 (114?) (156)	〔9〕 相聞. 86. 93. 116. 125. 128. 150?. 199. 199	〔2〕 169. 191
卷三〔21〕	〔3〕 (356. 413) (386)	〔13〕 304. 311. 327. 335. 335. 349. 349. 355. 370. 382. 417. 418. 450	〔5〕 319. 379. 388. 394. 435
卷四〔22〕	〔1〕 654	〔21〕 520. 530. 537. 543. 546. 551. 556. 556. 559. 619. 623. 638. 644. 648. 685. 705. 724. 765. 768. 779. 780	—
卷五〔11〕	—	〔10〕 814. 819. 848. 884. 885. 885. 887. 894. 894. 894	〔1〕 892
卷六〔10〕	—	〔9〕 916. 933. 948. 971. 972. 984. 1023. 1038. 1053	〔1〕 973
卷七〔10〕	〔1〕 (1080)	〔8〕 1204. 1248. 1258. 1262. 1266. 1273. 1281. 1305	〔1〕 1116
卷八〔3〕	—	〔2〕 1460. 1503	〔1〕 1520
卷九〔5〕	—	—	〔5〕 1694. 1718. 1759. 1786. 1800
卷十〔15〕	〔5〕 (1868. 2092. 2130. 2230. 2346)	〔4〕 1851. 2268. 2284. 2284	〔6〕 1886. 1926. 2007. 2008. 2267. 2330
卷十一〔23〕	〔6〕 2487. 2576 2794. 2830 (2387. 2774)	〔11〕 2355. 2362. 2367. 2488. 2510. 2522. 2560. 2732. 2743. 2755. 2758	〔6〕 2459. 2470. 2481. 2677. 2729. 2772 ?
卷十二〔18〕	〔8〕 2849. 2929 (2951. 3009) 3049. 3098	〔9〕 2962. 2965. 3015. 3046. 3057. 3086. 3098. 3099. 3192	〔1〕 (2983. 3077) 3101 前2者は「両者にあるもの」へ。
卷十三〔21〕	〔8〕 3229. 3327 (3227. 3230. 3270. 3312. 3314. 3329)	〔11〕 3234. 3239. 3242. 3247. 3270. 3295. 3302. 3302. 3302. 3305. 3344	〔2〕 3330. 3346 ?
卷十四〔10〕	〔6〕 3370. 3437 3497. (3525) (3429. 3493)	—	〔4〕 3358. 3431. 3559. 3573
卷十五〔1〕	—	〔1〕 3599	—
卷十六〔3〕	—	〔3〕 3791. 3791. 3791	—
卷十七〔2〕	〔1〕 (4028)	—	〔1〕 4031
卷十八〔1〕	—	—	〔1〕 4125
卷十九〔2〕	—	—	〔2〕 4169. 4185
卷二十〔2〕	〔1〕 (4339)	—	〔1〕 4382
計	48	117	44

書入れに「今按」「按」とあるものは真潮として扱った。真潮説といってもごく簡単なものがある。他説を「此説よろしき也」というものはいっている。「両者にあるもの」は、だいたい、あるいは半ば一致するものを含む。概して書入れは私考より簡略である（メモだから）。また、私考に真測説などが真潮説になっているのがある。これは誤字ではないはず（真測は岡部とある）で、春樹が真測説を真潮から聞いて真潮説と誤認したのもあるかもしれない。卷十2346「窺良布」について、私考には詳しい真潮説があるが、書入れは、訓と「トミノ冠字ナリ」とだけで、「真潮」ともない。これは真測書入本にも「ウカネラフ」の訓と「冠辞也」とだけある。すなわち、真潮の書入れは真測説であるが、真潮は会説などの席で、それを詳しく解説してきかせたので、春樹が真潮説と思ったのかもしれない。この場合「真潮説」というのも誤りではないが、源は真測にあるのである。また、偶然の一致も、もとより、あるであろう。（補注⑥）

1. 7. 真潮の書入れ説を若干紹介することにしよう。（句読点筆者）

① 有名な三山の歌

これは鴻巣氏の146ページに引用されているから略する。真測の書入本には「雄男志」の傍に「勇猛」とあるが、真潮書入本に「勇猛」と書かれている。また、真測本には、「高山雲根火耳梨」という書入がある。

② 卷一 83

真潮案ワタノソコハ只海底ト云ニハアラテ海ノ真中ヲ云ナルヘシ。

③ 卷三 335

吾行者 タビトモヨムヘシ。真潮。

④ 卷三 413

須麻乃海人之 真潮、もし客に行てよめるならば、間遠なる〔居宅ノ間遠なる方〕故ニ平常来りなれまいらぬ事よとよめるともいふへし。（私考にだいたい同様の説が無記名で出ている）

⑤ 卷四 546

有与宿鴨 アレトヌルカモ 契説 真潮案第二に芳野河ゆくせのはやみしはらくもたえぬ事なく有巨勢濃香毛トアリ。コノアリコセヌカモヲ、リコノ反ラニテ、アラセヌカモノ義トセリ。今案コノ有与宿鴨モアリコセヌカモトヨミテ、アリテクレヌカモノ義ニテハアラズヤ。与ノ字コストモヨマルヘシ。又ハ興ノ字ノ誤ニテモアルヘキカ。猶可考。

（契は代匠記初稿本である。精撰本ではアリコセヌカモとよんだ。真潮は契沖の後説と合う説を出したのである）

⑥ 卷七 1281

手力勞織在衣服斜 タチカラツカレオレル ロモクダチヌ契 今案、斜ノ字ゾノ仮字ニ用ルコトニ卷カニ例アリ。可見之。（左傍に「コロモン」とある）

（ゾとよむのは全釈に始まる（ただし誤字説）らしいが、真潮がすでにこの見解をもっていた。）

⑦ 卷十二 2849

彼夢見継哉（右傍）ソノヨノユメニミツキ、ヤ（左傍）ヨルノユメニヲミエツケヤ 真潮云、彼ハ夜ノ字ノ誤ナラン。シカラハ左点ノ通ニヨムヘキヤ。

（これは、私考に「真潮云、彼ハ夜ノ字ノ誤ニテ、ヌバタマノヨルノ夢ニモミエツグヤトヨムベキヤ。」とあり、朱で「本居翁云。御考イト宜シ。訓ハイカバ。夜夢見継哉（ヨルノイメニヲミエツゲヤ）ト訓ベシ。……継哉ハツゲヤト訓テ、ツゲト願フ意也」とある。すなわち、初めの真潮説が宣長の批判によって、書入では修正されているのである。）

⑧ 卷十二 2929

夕夕吾立待 真潮云、若ノ字誤字ニテ蓋雲歟。本居四言ニヨムヘントイヘドイカ、アラン。

（私考に「真潮云、若ハ蓋ノ誤ニテ、ケダシクモト訓ベキヤト。可更考。」それに朱で「本翁云。若雲ト四言ニ訓ベシ。タバ若ト云意也」とある。それを見て、この書入れは生じている）

1. 8. 高知県立図書館には、卷一から卷三までB本の書入れを（全部ではないが）写したらしい本がある（K92, 93）。あるいは、郷兄の目録にある別府氏に与えた本の一部分かもしれない。真

潮案は大部分そのまま写されているが、多少の誤脱がある。

真潮の説は、私考やB本のほかにも、しるされたものがある。たとえば、C本にある真潮説・春樹説には、私考やB本に見えないものもあるのである。(補註7)

1.9. 古義に見える真潮説と私考・書入との関係

巻	1	10				13			14.		15	17	20
番 号	13	1851	1867	1868	1982	3270	3323	3344	3424	3525	3598	3900	4339
私 考	○	×	×	○	×	×	×	×	×	△	×	△	○
書 入	○	○	△	△	△	○	△	○	△	○	△	×	△

○は古義引用説と同じ説が真潮説として出ているもの。△は同じ説だが真潮とないもの。×は古義引用説と同じ説がないもの。

このほかにも、たとえば、2267(巻10)など私考の真潮説とはほぼ同じ説が名なしで古義に出ているものがある。(補註8)

この表でわかるように、雅澄は私考を参照したであろうが、そのほかに真潮の書入本や、その他の人たちの書入本を参考にしたであろう。かれは真潮の甥景井(雅澄より7才下)と親しかったらしいから、真潮書入本を見せてもらう便宜があったであろう。また、真潮の説は、会読の席などで聞いて、諸人の書入本にも残っていたと想像される。

3598の歌について古義には、

大神真潮、備中にも、備後にも、玉島といふ所あり、又備後の瀬の海に、田島と云あり、その島に、玉村と云もありと云り。源巖水、次の歌の神島は、備中なるを、その上に序でたれば、こは備中の玉島の浦なるべし、と云り。

とあるが、B本書入れには

備中ノ内ニ玉島ト云所アリ可考 備後ニモ玉島アリ

とだけである。つまり、書入れが古義では更に増補されている。鴻巣氏のいわれるように、巖水の書いたものから、雅澄は得たのかと思われる(註10)。

1.10. 真潮も白文万葉集をテキストとして使用したかと思われる。B本がそれを証するともいえるのである。こうした白文テキストの必要さから、真潮の門人今村楽が、真潮没後6年、白文の古万葉集を刊行(享和3. 難波駐在の横田美水が事にあたる)したのである。その楽の序に、

ここに、わが土佐の国に、咲く花の匂ふがごとく榮えし、あをによし奈良の大宮の古ことを好みて、仙覚律師のしるへせしかなによらずて、いにしへにかへして、おのがじし力の程に読み解きなば、思ほえずよろしき読みも出でくべく、また、あまの安河、やすけきふしはさてありなむ、ゆつ岩群かたきところところに至りては、この学びにいそしみせし大人たちの改めし読みどもも、かたへにしるしつべく、かたがたにつきて頼りよけむと、友がき言ひ出でて、(原文万葉がな)(内閣文庫蔵本による)

とあって、その目的は、①先見にとらわれずによめば、よいよみも発見されよう、という真淵の研究法の実践のために、②難解のところは、先人の訓を書き入れるために、つまりは書きこみ用、であった。(補註8)

2. 代匠記の校訂

高知県立図書館山内文庫の万葉代匠記17冊は、巻一上、巻二を欠く15冊(巻三は上下2冊、八九と十三以下は2巻1冊)と別の巻一下1冊および序1冊とから成る。この15冊は、真潮の蔵書目録

の秘本の部にある「代匠記十七冊」のうち2冊が亡失したものと思われる。その書写は、巻一は次の奥書で宝暦6年真潮ということがわかるが、巻三以下は不明である。(補註9)

巻一下奥書 元文2年の米倉好古、寛保3年の松村正脩の奥書の写しのあと、

右此抄上下二卷宝暦五乙亥十一月十六日以松村正脩賢丈之藏本校考之。卷中朱書者全以松村氏本書加之者也。 武内十内幸雄識

右二卷宝暦六丙子八月十三日以武市丈本写之 谷丹内真潮

松村氏は垣守の友人、武市氏(寛政6没83)は垣守の門人であろうと思う(註11)。

巻四・六・八・九・十・十五・十七・十八・二十の終りに朱の小さい奥書がある。

巻四 再校畢 巻六 辛丑中冬一考終 壬寅後中秋初再校終 丙辰初春初重校

巻八 辛丑中冬末一考畢 壬寅初冬再校終 丙辰初春中重校 伴兄再校

巻九 辛丑末冬初一校畢 壬寅末冬中再校終 丙辰季春重校

巻十 辛丑末冬中一考終 壬寅末冬再校 丙辰季春重校畢

巻十五 寅孟春末一勘終 卯孟冬上旬再考畢 巻十七 寅仲春初一考畢 卯孟冬下旬再校畢

巻十八 寅中春初一校畢 卯中冬再考終 巻二十 寅季春初一勘畢

辛丑は天明元年、壬寅は天明2年、丙辰は寛政8年である。巻六～巻二十は、天明元年11月から2年3月までに一校、巻六～巻十八は、2年8月から3年11月までに再校、寛政8年1月から3月までに巻六～巻十を三校している。再校から三校までは12年を隔てている。

この本の中には、「真淵按」「真淵云」の頭書(契沖注釈に対する批判)があるところがある。それによって、底本は真淵所持本またはその転写本の写しと推定される。安永7年万葉契説全書書写の許可を得ている(鴻巣氏)から、校合本の1つはそれであろう。校者は、巻八の三校のあとに「伴兄再校」とあるのによっても、伴兄の追校があるであろうが、時日をしるした分は真潮であろう。かれは、寛政8年は閑地にあり、すでに70才で、前年病氣し、一時危篤になったことがあり、翌年没しているから、ごく晩年である。巻十五以下に三校がないのは、その氣力を失ったためかもしれない。さすれば、この代匠記の朱筆は、真潮の万葉研究の熱心さを示すものであろう。(補註10)

3. 万葉類聚と万葉助語集

郷兄の隈山蔵書目(文化6)下「北溪雜稿」の目に「万葉類聚 二冊」「同助語集 一冊」がある。すなわちこの3冊は真潮の著述である。今、山内文庫谷家旧蔵書の中にある「万葉類聚」2冊「万葉助語集」1冊はこれであること疑いない。

類聚はB5より少し小さい半紙本であり、助語集は同形の横本である。助語集は扉には、単に「助語部」とあり、類聚と組になるべきものかと思われる。類聚の「上」ともいうべき1冊のおわりのほうと、助語集とは、手紙・書付の紙背を使っているのであるが、これらの手紙・書付(あて名は丹内、万六)は、その内容からみて宝暦十年代のものと思われる。しかし、折目などが相当赤茶けているから、新しい手紙ではなく、古い手紙を用いたのであろう。したがって、この書の成立が宝暦十年以後おそらく明和以後ということはわかるが、下限はわからない。

万葉類聚は、ことばの部類を分ち、それを含む万葉集の歌の部分の抄出したもので、巻丁数(寛永版本の丁数)を示し、付訓し、あるいはせず、平がながきをして、要所は原文の字面を存し、〇〇をつけている。さらに注のついているものもある。その部類は次のようである。(原本には上下がついていないが、かりに上下と名づけておく)

上

心情 文書 身体 官職 年齢 遊獵 漁獵 喪事 地部 國郡郷部 居所 朝廷 京都 道路部 羈旅
方角 田野部 海浦部 石部 山部 川部 水部 木部 草部 虫魚部 鳥部 獸部 言語 同

下

器物 船 衣服 色 飲食 数 仮字 一字一句 以数語冠一語 義訓 異訓 待例 異体 疑難 略訓

端作

例

- 一ノ八ウ 見乍慕也
- 思遺^{キム}たつきをしらに ○ 取て曾思^{キム}奴布 (心情)
- 八ノ十九ウ
- 情具^{キム}伎物爾ソアケル 心ノオホツカナキ也 心ノクバモル意ナルヘシ
四巻メニ二首アリ昏露ニヨセタリ (言語)
- 不通事無有巨勢濃香毛^{クワコトナクアリコセマカキ} 二巻 十五ウ (義訓)
- 四ノ廿五丁オ
- 天雲乃遠隔乃極 (同)
ソクベ ヘタテノキハミトヨム例ナシ

待例には、アラズハの例を集めなどしている。疑難には「莫器円隣之」などあげている。

助語集はだいたい同様のもので、部類は「をの部」「古部」(これ、こそ、こね、こせ)「曾の部」(こそ、ぞ)「との部」……となっており、その順はヲコソトノモカサナハヤライキシニミリウクスツムユヘケテネヘメレサとなっている。助辞類を類聚したものである。2音節以上のものは、適宜上下音のどちらかに入れている。

- 二ノ四オ 二ノ五丁オ 古作表
- 死奈麻死物乎 ○ 山多豆乃迎乎将往 (をの部)
- 十廿廿八ウ
- 一本作焉鳥焉ともにこゝろなき助字也
月夜清鳥^{キヨシホ} いひ切ために置たるにや此巻にこの心なる例あり
必をと斗もよます^{サヤケン} (もの部)

類聚・助語集とも部を立てておいて、巻順に書きぬいていったものらしい。朱の書入れもあるが、十分に精選せられてはいない。文字も、類聚上はいていねいであるが、下は乱れている。助語集も雑然としている。

この仕事は何のためにしたのであろうか。万葉集類林のような辞書を作るのなら、50音順にでも並べておいたほうが便利ではなかったか。研究のために、あちこち参照するためであろうか。注がついているところからみると、類別辞書を作るつもりであったかもしれない。とにかく相当な努力をしたわけで、たしかに研究のための作業をしているのである。

真潮は、閑地にあったとき、万葉注釈の意図をもったかもしれない。旧知加藤千蔭が閑地において略解をものし始めたことを、かれは聞いたであろう(寛政初年)。大目付をやめて、かれにこの意が生じたとも想像せられる。この類聚・助語集はそのころの作製であろうか。

6 真潮の歌論

真潮には、万葉風を採る意見があったはずであるが、その一端が次の断片にうかがわれる。

- 後の世、うたは、こと葉を撰て聞なれぬ辞を嫌ふか故に、千首万首一やう也。森羅万象をうつすことあたはぬのみか、心もあさらかて、悲壯なることなく、豪放なることなく、縦横なることなく、壮麗なることなし。爾散瀟洒は時にあり。(1)
- 後世のうたは、雪月花のうゑをのみ詠することになりて、おもひをのふるの用せまし。(2)
- 長歌すたれてより、悲壯豪放、縦横壯麗の妙を見るによしなし。万葉集なからましかは、何により、わか国ふりの風雅をしらん。(3)
- 定家卿の、こととはは三代集に過へからずとの給へる、後世に毒をなかせる也。(4)
- 西土の文に頓挫といへることあり。万葉集にもまたあり。後の文うたにはなし。(5)

以上5条は「北溪集草本」(高知県立図書館山内文庫 k 90, 27)に見るところである。安永6年以後天明初年のころ、(真潮55才ぐらい)のものであろうか。

この5条において、真潮は、

- (1) 題材の拡張 ② ①
- (2) 用語の拡張 ① ④
- (3) 万葉集の価値

(ア) 悲壮豪放・縦横壮麗の妙あり。③

(イ) 「頓挫」あり。⑤

を主張している。ここに、「後の世」というのは、平安時代以後をさすのであろう。万葉に対しての「後の世」である。①も②も万葉集を基準にして見ているところに注目すべきであろう。

真淵が「歌意考」に、

いと末の世となりては、歌の心詞も常の心詞しも異なるものとなりて、歌としいへば、然るべき心を枉げ、言葉を求めとり、古りぬる跡をおひて、我が心を心ともせず詠むなりけり。

「にひまなび」に、

古への歌は調を専とせり。うたふものなればなり。その調の大よそは、のどにも、あきらにも、さやにも、遠くらにも、おのがし得たるまにまになるものの、つらぬくに高く直き心をもてす。且その高き中にみやびあり、直き中に雄々しき心はあるなり。

といい、

大和国は丈夫国にして、古へは女もますらをに習へり。故に万葉集の歌はすべて丈夫の手振なり。

といい、

古今歌集出でてよりは、やはらびたるを歌といふと覚えて、雄々しく強きをいやしとするは甚じきひが事なり。是等の心を知らむには万葉集を常に見よ。

といているのは、真潮のことばの源ではないかと思われる。もとより、真潮自身の体験をとおしたものであるが。ただし、「歌意考」「にひまなび」の出版は真潮の没後であるから、版本を見たはずはないのであるが、写本を見たかもしれないし、また、「歌意考」「にひまなび」に述べてあることは、真淵の平常口にしていたことでもあろうから、県居に出入していた間に、真淵から直接聞いたこともあろう。

ただ、その中で「頓挫」のことは、真淵の説にはないではなかろうか。これは漢文の「文法」から見たもので、漢学者らしい見解と思われる。「頓挫」の意味については、近藤奎氏の「支那学芸大辞彙」に次のようにある。

事理多端に涉り、或は事大にして容易ならず、彼此と入組みたることを。特に一峻語を下して遽かに転折し、屈然と手短に書きほくものにて、語句の急促なるはづみを形容する詞なり。……頓挫とは一ひしぎに事を取りこなす文勢なり。故に文勢一頓などいへる評語もあり。一しまり落着せしむることなり。故に抑揚は一人一事の上に就て之を用ふれど、頓挫は一転折の間に在りて、一語一句の上に就きて之を顕はすものなり。例へば大学に八条目を述べて「致知在格物」と結び。蘇軾の喜雨亭記に「吾以名吾亭」と一句を以て裁断するが如き是なり。独り長語を短語を以て挫するのみならず、又短語を長語にて挫することあり。

万葉集でみれば、38番の長歌の、青垣山と川とを述べ、「山川も依りて奉ふる神の御代かも」と結び、52番の長歌の、四周の山を述べ、「高知るや天のみかげ……御井の清水」と結ぶなどがそれであろうか。

真淵の「にひまなび」に、

田舎人の言にこそ古語は残りたれ。よく折みなば文の半ばかりは此の言にていはるべし。

ということばがある。真潮は、歌に方言をよみこんでいる。成功したのは稀であるが、真淵の示唆と自己の意見から、わざと採り入れたものもあるであろう。すなわち、用語拡張の主張の一つのあらわれである。

7 結 び

谷家三代の学を、それぞれの特色をやや誇張していえば、秦山神道、垣守有職、真潮歌学ということができよう。

その中において、万葉集に対する態度もかわるのである。秦山は補助資料として扱い、垣守は対象として扱うに至ったが、受身の姿勢である。真潮は能動的姿勢をとるに至った。垣守において、万葉は研究の中心ではない。「神職歌」の歌学の基本書として取扱うのである。真潮においては、万葉研究が「古学」の中の重要なことになってくる。

谷三代の学は、しかし、日本紀、とくに神代巻を中心古典とする。それと万葉との関係を見ると、秦山は万葉をもって神代紀等を考証した、垣守は日本紀、古事記の訓点を万葉集で校正しようといひ（真淵の教をうけてであろうが）、真潮はそれを実行しようとしたかのようである。それはひとり訓点のみではないと思われる^(注12)。

作歌との関係を見ると、秦山は万葉を典型と見ず、影戀もうけていない、垣守は1つの典型と見ることになり、万葉風をまねる、真潮は第一典型と見、万葉の精神を体得して作歌した。

真潮の能動的姿勢のあらわれとして、かれの説が相当多く伝えられている。また、万葉研究の環境をつくり、万葉風の歌を勧めた。それらの研究者歌人の流れの中に、鹿持雅澄が誕生したのである。

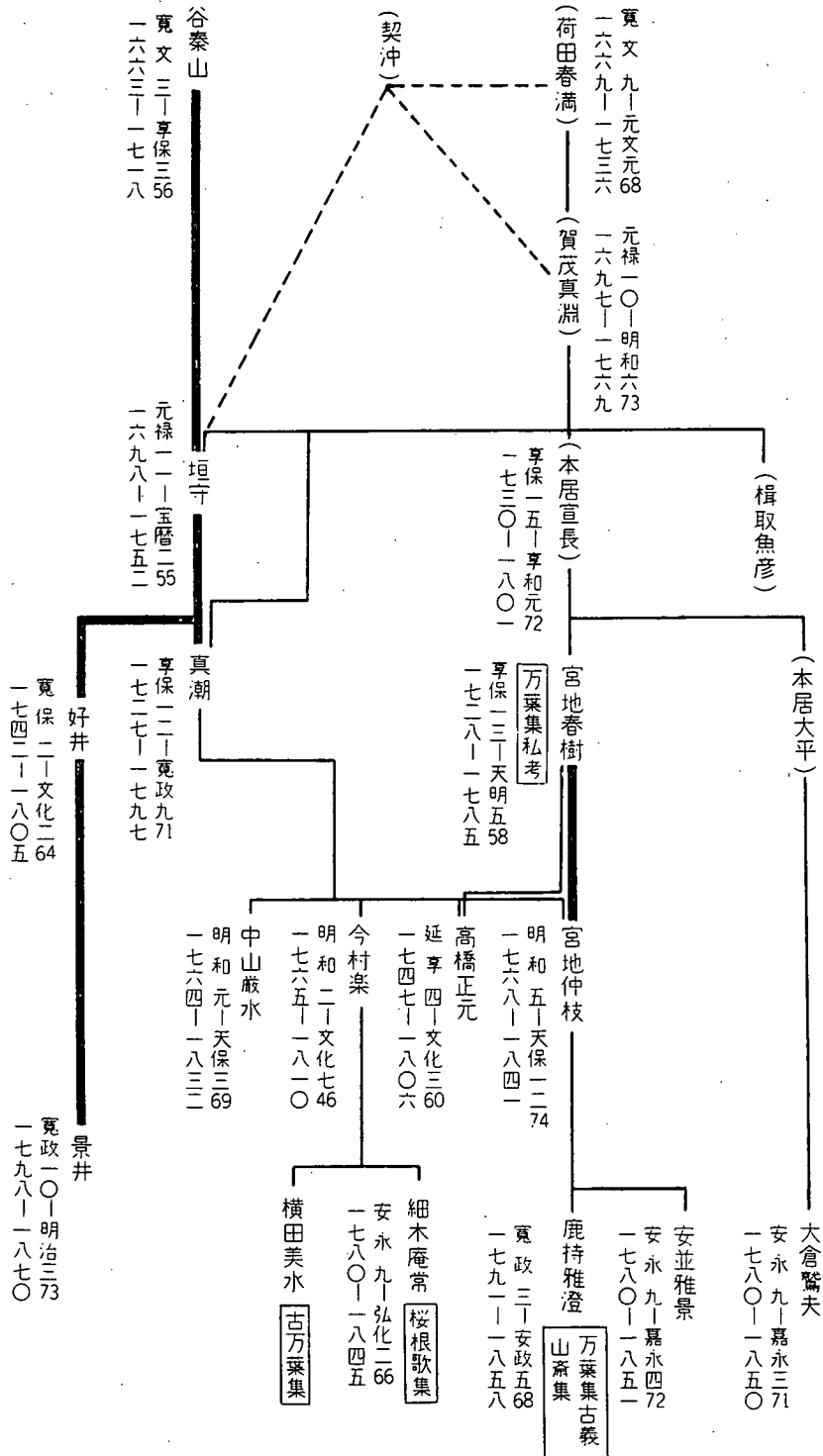
なお、万葉調の和歌が土佐で盛んになったのは、真潮らが先頭に立ったこととともに、土佐人の素朴・まこと・男性的を愛する気象のせいでもありと考えられる。

○ 本稿に紹介した資料は高知県立図書館のものが多く、そのほか、金刀比羅宮図書館、内閣文庫、高知市民図書館のお世話になった。また、松山秀美氏の「歌人群像」、南信一氏の「賀茂真淵の古典会読」（国語と国文学 昭和21年9月）、鴻巣隼雄氏の「鹿持雅澄と万葉学」には教えられるところが大きかった。ここに厚く御礼を申し上げます。

注

- (1) 実際、秦山が、「釈日万葉集曰召犬追牛之鏡〔マスキノカボミ〕此文字の墳様は何としたる仔細御座候哉。」と質問したのに対して、「不知事。歌道達人可尋候歟」と答えている。（神代紀三問 元祿10年）
- (2) 神代巻塩土伝・中臣被塩土伝の成立時期は秦山集の谷氏族譜による。当時「サテモサテモ自賛ナガラ明白ナルモノニ仕成候。爾來有來候何トモ飄筆ニテナマツ成抄ヲ見申輩ハ驚可申ト存候」と親友美代厚本への手紙（秦山手簡下5）に書いている。しかし、また、「御講会にて御不審の所か非難の所丁付被成帳にとち可被仰候。考候て少成共直し申度候。必々御遺慮被成ましく候」と宮地弥七郎に書き送っている（同73）。かれの会心の著である。今日伝わる草本は、ていねいな消書に増訂が施してあり、板本はその増訂に従っている。
- (3) 前稿。なお、垣守の懐紙に「四十七歳になりし時初て和歌の道をうけ給はりし事」とあるのを真淵が、「四十余り七つなる歳の冬……」と添削していることによっても証明せられる。延享元年垣守47才である。
- (4) 前稿。なお、寛延元年11月ごろの懐紙に「深夜聞尿声といふ事を ゆはりまる音も寒げく小夜ふけてね覚のうさをやるかたもなし」というのがあり、真淵が「野子を嘲弄せらるるなるへし」と怒っている事実がある。事件と関連があるかどうかかわからないが。
- (5) 南信一氏 賀茂真淵の古典会読
- (6) 宗武の命により、延享年代に著したもの。奥書は鴻巣氏の書に紹介せられている。現在知られる真淵の万葉集注釈では、遼江歌考を別とすれば、もっとも早いものである。巻一は万葉巻一の、巻二は万葉巻二、巻三の抄注で、赤人の富士の歌におわる。万葉巻二は人麿の妻に別れる時の歌だけである。
- (7) 前稿9ペ引用の鍋山隨筆の文句と真淵書簡と一致する。なお、前稿の入門の年時は訂正する。真淵の真淵入門は従来宝暦13年とせられていたが、小山正氏はすでに賀茂真淵伝で疑っている。
- (8) 鹿持雅澄所持本万葉集の奥書（鴻巣氏 351ペ）に、その本の親本は、寛政5年10月橘経亮校本を以て書入れた由の中山厳水（30才）の奥書があるという。この経亮本はあるいは好井によって伝えられたものか。
- (9) □は鴻巣氏は「養」または「護」とよんでいられる。そのようにも見える字であるが、判読しがたい。
- (10) 厳水書入本万葉集が竹柏園にある由であるが、鴻巣氏の解説（364ペ）には真潮の名が見えない。あるいは脱落であろうか。なお、真潮の書入れは、私考・古義にくらべると、簡略なことが多い。書入れをメ

土佐の万葉学者および万葉風歌人の系譜



は血統

は学統

モとしての真潮の講義などが中間にある場合が多いかと思われる。また、私考によって書入れたと思われる部分も私考より概して簡略である。

- (11) 松村正脩は茂左衛門か、茂左衛門は延享2年以前に古今余材抄、百人一首改観抄をもっていた（江戸立用事覚）。
- (12) 真潮も日本紀を講義し、神代巻のみならず人代に及んでいる。安永9年雄略紀講了や、天明4年日本紀会、寛政4年神代巻開始などの記録がある。仲枝の「日本書紀筆記」が残っていた由（鴻巣氏137ペ）である。その態度は「儒仏の理を去って見る」ということであった（鴻巣氏同ペ）が、これは秦山以来の方針であった（元禄14年送竹内常成市原辰中序に「自五部書以下作者紛紛、古書或淫於仏、今作尤蔽於儒」とある）。その方針が垣守をへて、真潮に至っては、「国学」の影響のもとに、いっそうはっきりしてきたといえるであろう。なお、垣守のことばは前稿に引用。

- ◎ 前稿注訂正 前稿10ペ注(14)の中「志田延義氏「荷田春満」とあるのは、「三宅清氏「荷田春満」の誤りである。三宅氏に謹んでおわび申し上げます。

補注

- (1) 金刀比羅宮の真淵書入本万葉集については、高橋貞一氏（賀茂真淵自筆書入万葉集に就いて 国文学論叢昭和10年7月号）・南信一氏（金刀比羅宮所蔵善本書目 讃岐史談昭和15年9月）の報告がある。奥書のもっとも古いのは、宝暦9年閏7月会説訖（巻二十）で、垣守が出席した度の会説の次の度の会説のとき書入れたものかと思われる。したがって、垣守の出席した会説のころの真淵説で後に改められたものは、真淵書入本には見えないだろうと推測した。なお、垣守本にあって、真淵本には書入れのないものも「一致しない」数にはいつている。真淵書入本の閲覧については、金刀比羅宮図書館の臼杵和夫氏、松原秀明氏にたいへんお世話になった。
- (2) A本の巻一は垣守書写であるが、巻十九の一部分もそうらしい。なお、A本書入れは、巻十四までで、十五は句読のみ、十六以下は書入れはない。垣守の書入れ以外には、真潮のもあると思われるが、真潮以外のものもあるがどうか不明。
- (3) 好井は采薇と号した。重名の「しくれのはれま」に「しみづ」とふりがなしてあるので、そうよんだ。しかし、父垣守が、神代紀下の「好井」について「ヨシミツと云点がよい」といつている（早別草）から、ヨシミツとよむかもしれない。
- (4) 真潮の書入れは、新旧入りまじり、時時に記入したものもあるであろうが、ある時期に全部の巻をとおしてなされたのではないらしいことが注目される、なお精査を要するが、これは、繁忙のせいであろうが、春樹が全部をとおして考えたのと対照をなす。
- (5) 巻一55の麻裳ヨシの説は古義に春樹説とあるが、真淵説である。私考には「真淵」とあるが、宣長の評にも「考モ宜シカラズ、御考安ラカニテ」とあり、真淵をば爾部翁といつているから、真淵ではない。B本書入れにはこの説はないが、C本には真淵としてある。
- (6) 巻九の「足利説代」（1718）についても、私考には、真淵説として、字のままにアトモヒテとよむべしといつている。ところが、この訓は、垣守書入本（A本）にも、真淵書入本にもあり、真淵の訓でもあった。真淵書入本には宣長らの説もとりいれられているから、真淵説がとりいれられる可能性もあるが、垣守書入本にあるからは、真淵説に由来するものではあるまい。すなわち、この真淵説も真淵説に由来するか、偶合かである。なお、巻十四など、私考にあって書入れにないのは、真潮がみずから旧説をすてたのかもしれない。
- (7) 真潮の説には、誤字説が多いのであるが、これは真淵の影響と思われる。
- (8) 古万葉集は、寛永版本の訓を除いて、字配りなどはそのままにしたものらしい。木活字本である。誤植や欠字もあり、善本とはいいがたい。しかし、こうしたものが要求せられたところに意義がある。
- (9) 別の巻一下は、吉本虫夫（垣守門人）の筆写本で、谷正兄が購入したもの。序1冊は似閑の序である。
- (10) 巻三以下に頭書された「真淵按」「真淵云」は15あり、ほかに「潮案ニ真淵ノ考也」が1つ、「遠州語」とあるのが1つある。「真淵按」の中に「本ノ」と傍注したところがある。そして、真淵按（云）はしばしば朱でかすり消し、あるいは朱点で消してある（校合本にないことの印と見られる）。以上のことから、底本を真淵所持本の写しかと推定した。すると、底本書写は垣守時代かもしれない。しかしまた、巻一を真潮が宝暦6年に写しているから、巻三以下がそれ以前のものとは考えにくいようにも思われる。真潮の名の出ているのは、上の「潮案」だけのようであるが、とにかく、それによっても、真潮校は動かせないと思われる。校合本の1つは似閑本かもしれない（別に似閑の序1冊があることからの想像）。校合した本は、底本とずいぶん異なる部分もあったらしく、書入れでは場所がなく、はり紙をし、さらに別紙を綴じてこんであるところもある。なお、巻三298のスミグ川に関する頭書は、私考に引くものとほとんど全く同文であるから、私考はこれから引用したかと思われる。同説は真淵の抜抄略解にもある（文句は異なる）から、この頭書は、延享年代以前のもものではあるまいかと思われる。

（昭和39年9月30日受理）